

Title	高校生年齢への糖尿病に係る意識調査から考える情報伝達の在り方について
Author(s)	片山, 景; 犬塚, 隆志; 岡本, 摩耶
Citation	年次学術大会講演要旨集, 34: 841-844
Issue Date	2019-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16521
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

高校生年齢への糖尿病に係る意識調査から考える情報伝達の在り方について

○片山 景, 犬塚隆志, 岡本摩耶 (一般社団法人日本薬理評価機構)

peij@peij.or.jp

1. 緒言

現在、日本における糖尿病患者数は 320 万人を超え¹⁾、「糖尿病が強く疑われる」とされる成人の患者は、2016 年時点で推計 1000 万人を突破した²⁾。

糖尿病は、1 型糖尿病、2 型糖尿病、遺伝子の異常やほかの病気が原因になるもの、妊娠糖尿病、の 4 つに分類される。日本における糖尿病の 95% は、内臓脂肪の増加や過食・運動不足を主たる原因とする 2 型糖尿病であることから、テレビやラジオ、インターネットによる予防を目的とした情報発信が成されているが、患者数は増加し続けているのが現状である。

一方、主に自己免疫によってインスリンを産生する膵臓の細胞を破壊してしまい、分泌できなくなって発症する 1 型糖尿病は、0~14 歳の日本人では年間 10 万人当たり 2.4 人が発症するとされる。患者数が少ないことから社会の理解が進んでおらず、「食生活の乱れや運動不足が原因」「生活環境に問題がある」などの誤った情報により、治療の妨げのみならず、患者本人や家族が不当に傷つくことが多いという。このような状況を打開するためにも、社会全体が 1 型糖尿病についての正しい知識を持つことが望ましい。特に学齢期においては、学校の教員や生徒が 1 型糖尿病について適切に理解することにより、患者は周囲の無理解や孤立感に悩むことを軽減できると思われる^{3, 4)}。

NPO 法人エビデンスベーストヘルスケア (EBH) 推進協議会による「糖尿病についての全国意識調査 2009」の結果は、糖尿病患者の人数や生活習慣について明らかにしているが、糖尿病に関する知識の有無やその入手経路等に関する情報は明らかになっていない。

本研究では、高校生年齢における糖尿病についての認知度と情報源を調査し、どのような情報源を利用することで糖尿病に関する正しい情報の発信が可能になるかについて検討を行った。

2. 研究方法

調査対象者及び方法

2018 年 11 月、神奈川県内の私立 K 高等学校に在籍する 1 学年から 3 学年までの男女 747 人の生徒を対象に各クラス担任を通じて調査票を配布し回収した。

調査項目

調査票は、無記名自記式で、年齢・性別等の基本的属性のほか、糖尿病についての認知度及び情報源に関する諸項目である。

倫理的配慮

調査への参加は本人の自由意思であり (調査参加を拒否しても不利益を被ることはない)、回答は無記名で結果は個人を特定できない方法で行うことを紙面上で説明した。また、回答者への啓蒙活動として、糖尿病に関する知識をまとめた用紙を全員に配布した。本研究の実施に際しては、学校側の了承を得た上で行っている。

分析方法

高校生の糖尿病に関する知識の情報源、正しい知識の保有状況について実数的な処理を行い、解析を行った。

3. 結果

神奈川県内の私立 K 高等学校に在籍する 1 学年から 3 学年までの男女 747 人に調査票を配布し、602

人から回答を得た（回収率 80.6%）。このうち、データ等に欠損のある 27 通を除く 575 通に関して分析を行った（有効回答率 95.5%）。分析対象者の性別内訳は、男性 402 人、女性 159 人、その他 14 人で、平均年齢は 16.6 歳である。

糖尿病の認知度

「糖尿病を知っている」と回答した者は 575 人中 520 人（90.4%）であった。性別の認知度を図 1 に示す。男性は 402 人中 355 人（88.3%）、女性は 159 人中 153 人（96.2%）、その他は 14 人中 8 人（57%）であった。

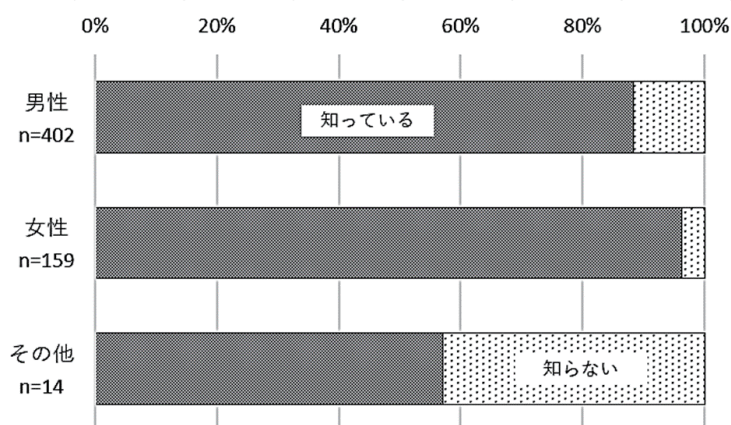


図 1 高校生年齢における糖尿病の認知度（性別）

糖尿病の情報源

「糖尿病を知っている」と回答した 520 人が情報源として選択（複数選択可）した結果を図 2 に示す。糖尿病の情報源として最も多く選択されたのは、「テレビ・ラジオ」で 387 人、次いで「家族」222 人、「授業」209 人、「インターネット」184 人であった。

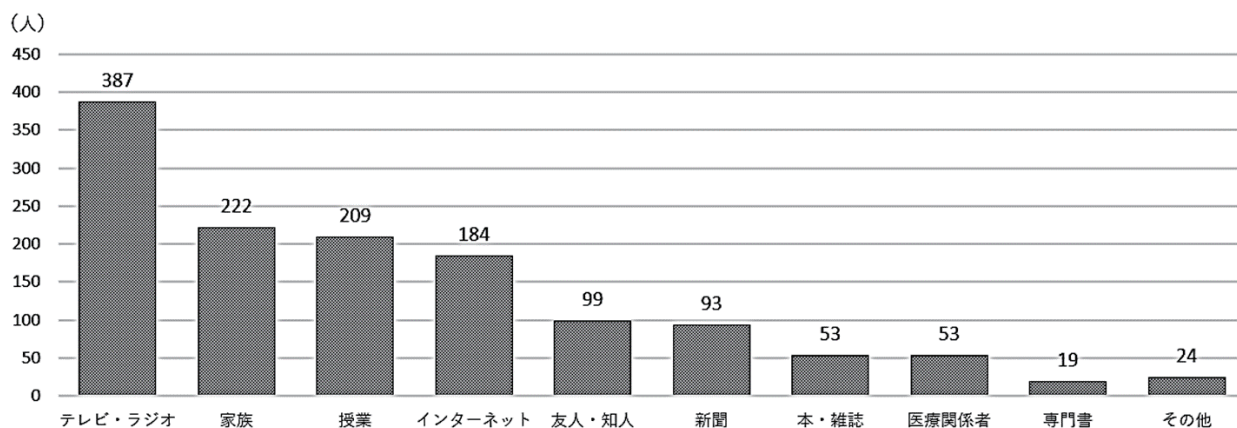


図 2 糖尿病の情報源（複数回答可）

1 型／2 型糖尿病の認知度と情報源

「糖尿病を知っている」と回答した 520 人に対し、1 型糖尿病と 2 型糖尿病の区別ができるか否かを尋ねた結果、98 人（18.8%）が「区別できる」と回答した（図 3-1）。

区別できると回答した 98 人が情報源として最も多く選択（複数選択可）したのは、「テレビ・ラジオ」で 44 人、次いで「インターネット」と「家族」がそれぞれ 26 人、「授業」と「友人・知人」がそれぞれ 20 人、「新聞」15 人、「医療関係者」11 人、「本・雑誌」7 人、「専門書」5 人であった（図 3-2）。



図 3-1 高校生年齢における 1 型／2 型糖尿病の認知度

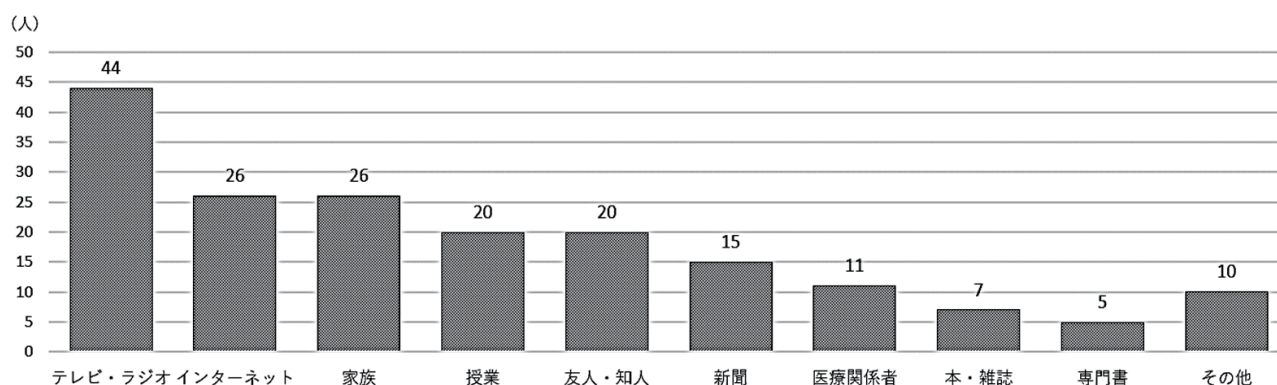


図 3-2 1 型／2 型糖尿病の情報源（複数回答可）

情報源と糖尿病に関する知識

「糖尿病を知っている」と回答した 520 人に対し、糖尿病に関する知識を尋ねる質問への正解率を情報源別に比較した結果を表 1 に示す。

表 1 糖尿病に関する知識の正解率と情報源

グループA 能動型の媒体			グループB 受動型の媒体		
● 本・雑誌 ● インターネット ● 専門書			● テレビ・ラジオ ● 家族 ● 知人・友人 ● 新聞 ● 授業 ● 医療関係者		
上記のいずれか（または複数）を含む情報源を選択した者			上記のいずれか（または複数）のみを選択し、能動型の媒体を選択しなかった者		
n=199			n=321		
問題	正解率	正解率	問題	正解率	正解率
血糖値が上がる病気である	90.0%	85.4%	血糖値が上がる病気である	90.0%	85.4%
薬で治せない病である	97.0%	98.6%	薬で治せない病である	97.0%	98.6%
合併症がある病である	68.8%	51.7%	合併症がある病である	68.8%	51.7%
症状がなくとも病院に行かなくてはならない	96.0%	96.9%	症状がなくとも病院に行かなくてはならない	96.0%	96.9%
太っていないくても糖尿病にはなる	91.5%	95.3%	太っていないくても糖尿病にはなる	91.5%	95.3%
血縁で発病することもある病である	51.8%	34.3%	血縁で発病することもある病である	51.8%	34.3%
1 型糖尿病が存在する	23.1%	16.2%	1 型糖尿病が存在する	23.1%	16.2%

グループ A (n=199) は、「本・雑誌」、「インターネット」、「専門書」の能動型の媒体のいずれか（または複数）を情報源として選択した者、グループ B (n=321) は、能動型の媒体のいずれも情報源として選択しなかった者とした。

グループ A はグループ B に比べ、合併症の存在、遺伝の可能性、1 型糖尿病の存在に関する質問に対する正解率が高い傾向が認められた。

4. 考察

本研究は、高校生年齢における糖尿病の認知度と情報源を調査することにより、どのような情報源を利用することで糖尿病に関する正しい情報の発信が可能となるかについて検討することを目的として実施したものである。

糖尿病を知っていると回答した者が最も多く選択した情報源は「テレビ・ラジオ」であった。また、一歩踏み込んだ 1 型糖尿病と 2 型糖尿病の区別が可能と回答した者が最も多く選択した情報源も「テレビ・ラジオ」であった。これは、マスメディアが糖尿病に関する特集を放送する際に、やや高度な情報も併せて提供する機会があることと関係すると推測される。

その一方で、糖尿病に関する知識を問う質問の正解率からは、より高度な情報を入手する際には、「インターネット」「本・雑誌」「専門書」といった能動型の媒体が情報源として適していることが示唆される結果となった。これらから、「テレビ・ラジオ」等のマスメディアから得た情報を基に、「インターネット」「本・雑誌」「専門書」といった能動型の媒体を用いて、さらに深掘りした情報を獲得していることが窺える。

本研究では、情報源を複数回答する形式としたため、情報を取得するきっかけとなった媒体についての分析が困難であった。このことは、次回の調査設計に活かしたい。また今回の調査では、糖尿病患者が在籍しているクラスとそうでないクラスを区別せずに処理しているが、身近な罹患者の存在の有無が認知度に及ぼす影響について明らかにすることも意義のあることと思われる。今後の調査ではこれらを含め、糖尿病についての意見等を自由記述で問いたい。

5. まとめ

高校生年齢における糖尿病の認知度は 9 割を超える一方で、1 型糖尿病と 2 型糖尿病の区別等の高度な情報については認知度が低い。高校生年齢においては、テレビ・ラジオ、インターネットが主な情報源であることから、糖尿病に関する正しい情報を提供するためにはそこに存在する情報を充実させること、健常者が情報にアクセスしやすくすることが重要であることが示唆された。

参考文献

- [1] 厚生労働省「平成 29 年患者調査の概況」
- [2] 厚生労働省「平成 28 年国民健康・栄養調査」
- [3] 中村伸枝 他、1 型糖尿病をもつ子どもと健康児の QOL の比較、糖尿病、49、11-18 (2006)
- [4] 宮川しのぶ 他、1 型糖尿病患児の学校における療養行動、小児保健研究、61(3)、457-462 (2002)